

アジア鑄造技術史学会 第2回 表彰審査結果
- Report of a judgment on the second commendation -

審査委員 横田 勝
岡内 三眞
山中 理
赤沼 潔

表記表彰の審査を2012年7月～8月に行い、下記のように受賞作を決定した。また、それぞれの受賞理由を記す。

[2009年度]

研究大賞 該当なし

研究奨励賞

a) 実験・調査研究部門

吉田広、岩永省三、柳浦俊一 「『青銅器の同範関係調査報告書Ⅰ-武器形青銅器-』の調査成果」『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』4号

b) 若手研究者部門

鈴木瑞穂 「黒崎鑄銭場における馬白目(鉛製鍊スパイス)の利用について」『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』4号

<受賞理由>

●吉田広、岩永省三、柳浦俊一 「『青銅器の同範関係調査報告書Ⅰ-武器形青銅器-』の調査成果」『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』4号

本論文は、弥生時代の武器形青銅器の同範関係を探った内容である。大量の武器形青銅器を出土した出雲荒神谷遺跡の銅剣同範認定調査ののちに、本論の対象となる銅矛と銅戈についても検討を加えている。

銅矛では、耳の突線文様の一致や型ずれ痕跡、連結式鑄型の接合位置、範傷などいくつかのポイントで同範の可否が判定できるとし、佐賀県検見谷9号と12号、佐賀県日達原2号との同範関係を認定している。

銅戈では、樋に鑄出した有軸綾杉文や内に鑄出された突線文様が有力な判断基準になるとし、福岡県隅・西小田15号と20号、福岡県住吉神社3号のひと組、隈・西小田6号と住吉神社5号のひと組、福岡県原町4号と34号のひと組、合計3組の同範関係を判定している。

とりわけ銅剣を含めた武器形青銅器では、範傷の一致が同範関係認定の決定的証左となると指摘して、銅矛での具体例を拡大写真で示している。

武器形青銅器における同範関係の存在頻度を確認すると、銅矛で平均鑄造本数最大1.143本、同範組比率最大9%、銅戈で1.115、8%となる。島根県神庭荒神谷銅剣の平均鑄造本数1.310本、同範組比率19%に比べると小さい。武器形青銅器の同範関係は多くなく、1鑄型の鑄造本数は1.1本を大きく超えることはないと予測している。銅鐸の同範組比率20～70%、1鑄型の鑄造個数2以上に比べて大きな差があると指摘している。

このように銅剣、銅矛、銅戈の同範認定基準をしめして各地の資料調査を実施し、着実に同範関係を認定していく。存在頻度の確認から銅鐸に比べて、武器形青銅器の同範本数はきわめて少ない事実を明らかにしている。本論文は、弥生時代青銅祭器の製作や使用の地域差にも迫りうる新たな研究と評価できる。

●鈴木瑞穂 「黒崎鑄銭場における馬白目(鉛製鍊スパイス)の利用について」『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』4号

日本国内に散在する鑄銭場の一つ、九州、黒崎鑄銭場(17世紀初頭)から出土した鋳滓、坩堝、そして鑄棹、金属塊等の綿密な化学的成分分析を行い、その結果を基にして黒崎鑄銭場で製造された模鑄銭の原料の出自、流通経路について考察している。

その結果によると、鉛製鍊に伴うスパイス(馬白目)を鑄銭に利用しており、その主成分はFeとAsの混合物であるとしている。また原料の銅成分は調査の結果から純銅ではなく青銅が使われていたのではないかと推察している。日本国内における銅器には一般にAsが含まれているが、中国古代からの銅器にはAsが含まれないものが多いとされており、黒崎鑄銭場で生産された模鑄銭の原料と推察した青銅合金はAs分析値の結果から中国渡来の青銅製品が再利用されたのではないかと想像を掻き立てる。日本国内に散在する鑄銭場跡地はタイムカプセルにも例えられ、貴重な遺物の収集が可能であり、これらを総合的に調査、分析、考察すれば日本国内におけるCu, Pb, (As)やFeなど原料の産出地、流通経路や製鍊法、さらには鑄造技術の解明にも繋がると考えられ、その端緒を切り開いたことに本研究の意義を見出す。